

3C08 前作キュウリに使用した農薬の後作コマツナへの移行

○青木 こずえ、市原 勝(高知県農業技術センター)

目的)

残留農薬等のポジティブリスト制の施行により、基準値が設定されていない作物には一律基準 0.01ppm が適用され、販売等の禁止措置が執られるようになった。本制度は、流通する全ての食品を対象としており、農協や市場へ出荷される農産物の他、直販市で販売される農産物も例外ではない。直販が盛んな本県では、前作に使用した農薬の後作への影響も視野に入れ注視していく必要がある。今回、前作キュウリに使用した農薬の後作コマツナへの影響調査を実施した。

方法)

当農業技術センター内の硬質フィルムハウスで下記の試験1および試験2を実施し、収穫時のコマツナおよび播種前と収穫時における土壌中農薬濃度を測定した。

試験 1;ホスチアゼート粒剤、カズサホス MC 粒剤を全面土壌混和处理し、2007 年 11 月 22 日にキュウリを定植した。100 日間キュウリを栽培し、メタラキシル水和剤を 3 回処理して 2008 年 2 月 29 日に引き上げた。その後耕耘し、3 月 7 日に後作コマツナを播種し、4 月 11 日に収穫した。

試験 2;ホスチアゼート粒剤およびピラクロホス粒剤を全面土壌混和处理し、2008 年 9 月 25 日にキュウリを定植した。2009 年 2 月 12 日まで 141 日間、栽培を継続し、この間にプロシミドン水和剤を 6 回、ミクロブタニル水和剤を 5 回処理し、引き上げた。その後耕耘し、2 月 20 日に後作コマツナを播種し、3 月 25 日に収穫後、さらに 4 月 3 日に同品種を播種し、4 月 30 日に収穫した。

結果および考察)

後作収穫時、土壌中にカズサホスは 0.42mg/kg、ピラクロホスは 1.5kg/mg、ミクロブタニルは 0.13mg/kg 残留したが、いずれの成分もコマツナへの移行は認められなかった。メタラキシルおよびプロシミドンは土壌中にそれぞれ 0.10mg/kg、0.18mg/kg 残留し、コマツナに移行し 0.01mg/kg、0.02mg/kg の濃度であった。ホスチアゼートは試験 1 で、土壌中に 0.32mg/kg 残留し、コマツナ中 0.16mg/kg であった。試験 2 では土壌中に 0.07mg/kg 残留し、コマツナ中 0.01mg/kg であったが、続いて播種したコマツナでは、検出限界以下であった。

以上より、薬剤処理後、前作キュウリの栽培期間を一定以上確保することにより、後作コマツナへの移行を防止できると考えられた。

Uptake of pesticides into succeeding Japanese mustard spinach (Komatsuna)
after application on cucumber

Kozue Aoki ,Masaru Ichihara (Kochi Agricultural Research Center)